

蘇るおじさん〜ヨミオジ〜

梗概

ゆずる（14）の叔父である誠（39）は長い引きこもり生活の果てに力尽きる。

しばらく経ち、ゆずるは祖母幸子から誠が遺したCDRの中身を確かめてほしいと頼まれる。

ゆずるが調べると、CDRには誠の作った自作ゲームが入っていた。

CDRの中身を知った幸子は「息子の生きた証かもしれない」と胸を膨らませるも、自作ゲームは粗末な出来の将棋ゲームだった。

ゲームをプレイするうち、ゆずるの脳裏に誠と将棋を指して遊んでいた頃の記憶が蘇る。

ゆずるは何とかして叔父の生きた証をゲーム

の中から探し出そうとするも、どこにもない。

ゆずるが諦めかけたときだった。偶然見つけたおまけモードを開始すると一枚の写真が現れる。

そこには将棋を指す在りし日の誠が映っていた。その景色こそ叔父の生きた証だと気づき、ゆずるは晴れやかな気持ちでゲームを終える。

人物

ゆずる (5) (14) 中学生

誠 (29) (39) ゆずるの叔父

智子 (44) ゆずるの母

幸子 (70) ゆずるの祖母

○ゆずるの実家・居間

タンスの上に置かれたミニ仏壇。

幸子(70)、仏壇に小さな花瓶を添える。

幸子「(仏壇へ)誠。智子とゆずちゃんが会いにきてくれたよ」

ゆずる(14)、テーブルに座ってswitchの携帯モードで麻雀ゲームをしている。

幸子、仏壇から離れると智子(44)へ、

幸子「お昼はもう食べたのかい？」

智子「うん。食べてきた」

幸子「うちには夜までいるんだろ？」

智子「そのつもりだけど。お母さん、あれから何か変わりあった？」

幸子「そうだねえ。特にないよ。あんたのほ

うはどうなの？」

智子「ううん。特に。まーゆずるが部活辞めちゃったくらいかなー(と責めるようにゆずるを見る)」

ゆずる「(視線を感じ)…」

智子「中途半端で辞めたら内申書に響くから

続けなくなって止めたんだけど」

幸子「そう。せっかく頑張ってたのにねえ。

ゆずちゃん、ほんとやめちゃうの？ 将棋」

ゆずる「(答えない)」

智子「(幸子へ)で、お母さん、用って何？」

幸子「そうそう」

幸子、タンスの引き出しを開けて何かを
取り出す。

幸子、テーブルの上にそれを置く。

テーブルに置かれた一枚のCDR。

幸子「ゆずちゃんにお願いしたいってメール
でいったのはこれなの。あれから一段落つ
いて、あの子の部屋を整理してたら出てき
たのよ」

ゆずる「(テーブルをちらと見る)」

智子「これって…」

幸子「そうなのよ。もしかしたらと思って…」

智子、CDRを手にして眺める。

ラベルに「自作ゲーム」と書かれてある。

智子「わかった。お母さん、誠の部屋のパス

コン使わせてもらおうよ」

幸子「いいけど」

智子「ゆずる、ついてきな」

ゆずる「：？」

○同・誠の部屋

物が片づけられた小ぎれいな室内。

机の上にデスクトップパソコン。

智子、先ほどのCDRを机におくと、カー

テンを開ける。

秋の日差しが入ってくる。

ゆずる、部屋の前に立ったままでいる。

ゆずる「(怪訝そうに)：なんだよ？」

智子「お葬式の時も聞いたかもだけど、ゆずる、あんたほんとに弟のこと覚えてないの？」

ゆずる「だから覚えてないって」

智子「小さい頃にいっぱい遊んでもらったんだけど。寂しいねえ」

ゆずる「(CDRが気になる)何だよ、それ」

智子「…うん。弟が生きてた頃、おばあちゃん
んが誠から聞いたんだって」

○同・台所（回想・深夜）

誠（39）、だらしない格好で冷蔵庫を漁
っている。

誠、魚肉ソーセージを取り出す。

誠、ソーセージをくわえながらコンロの
上に置かれた鍋のフタを開ける。

と背後から幸子の声。

幸子「あんた、いい加減働いたらどうなの」

誠「…」

幸子「いつまでもアテにされても困るよ。私
も歳なんだから」

誠「…ゲームを作ってるんだ」

幸子「何だった？」

誠「ゲームだよ。ゲーム」

幸子「そんなもん作ってどうすんのさ」

誠「別に。ただ、もし俺が死んでも作ったも
のはずっと残るから」

○（戻って）誠の部屋

智子「だからおばあちゃんがね、そのゲームが寂しい人生を過ごしたあの子の生きた証になるんじゃないかって」

ゆずる「…」

智子「てことであんたにその中身を確かめてほしいの」

ゆずる「え？ 俺が？」

智子「お母さん、ゲーム全然わかんないもん」

ゆずる「（不気味そうに）え、でもこの部屋って」

智子「何よ？」

ゆずる「（口ごもる）いや…幽霊とか」

智子「何いってんの。別にいいでしょ。弟は自分で何かして死んじゃったわけじゃないんだから」

ゆずる「…」

智子「じゃそういうことだから頼んだよ」

智子、部屋を出ていく。

ゆずる「∴」

ゆずる、渋々パソコンを起動させる。

ゆずる、CD-Rを入れ、ファイルを開くと

ゲームが起動する。

画面にでかかど将棋の駒が表示される。

ゆずる「∴将棋？」

○ゲーム画面

チャチなトップメニューに以下のテキスト。
ト。

「○対局モード」

カーソルを動かして「対局モード」をクリックする。

画面中央に割り箸のような細い長い横棒が現れる。

○誠の部屋

ゆずる「∴??？」

ゆずる、ゲーム画面を凝視する。

ゆずる「(わからない)」

ゆずる、まだ画面を見ている。

ゆずる「(気づく)これって…将棋盤？」

ゲームから以下のボイスが聞こえる。

vo「対局開始です。あなたは先手です」

ゆずる「いやいや」

○ゲーム画面

画面上部から将棋の駒が横棒(横から見た将棋盤)の上にばらばら降ってくる。

将棋盤の中央に駒の山が作られる。

ゆずるの声「…え？」

ゆずるの動かすマウスカーソルが躊躇いがちに山へ向かう。

ゆずるの声「将棋倒し？」

マウスカーソルが駒を掴もうとするも、駒の倒れる音がする。

vo「先手指し手なし」

ゆずるの声「…え？」

後手番のCPUが駒を器用に掴む。

パチッという駒を指した時の心地よい音

が響く。

vo 「後手∞八飛」

ゆずるの声「いや…え？」

マウスカーソル、また駒を掴みきれず。

vo 「先手指し手なし」

後手番のCPUが駒を器用に掴む。

パチッという駒を指した時の心地よい音が響く。

vo 「後手∞九銀」

ゆずるの声「(戸惑う) 何だよこれ。つか何

なんだよこのアングルは」

ゲーム設定画面をクリックする。

「アングル設定」の項目をクリック。

以下のテキストが出る。

「(株)水平 (デフォルト)

真上から

真下から

ゆずるの声「(ぼやく) デフォルトおかしいだろ。つかそもそもこの設定いらないし。つか何でチェックマークが株式会社のマーク

なんだよ」

「真下から」を試しにクリック。

「水平（デフォルト）

真上から

（株）真下から

そのまま設定画面を閉じる。

対局画面に将棋盤の裏面がドーン。

○誠の部屋

ゆずる「∴」

智子、部屋にやってくる。

智子「どう？」

ゆずる「え？ いや、これって」

智子「ほい。おばあちゃんから差し入れ」

智子、持っていたファンタグレープを差

し出す。

ゆずる「∴俺ファンタオレンジが好きだって

いってるだろ」

智子「どっちでも同じようなもんじゃん」

ゆずる「∴全然違うし」

智子「(ゲーム画面を見て)何? まな板?」

ゆずる「いや…」

ゆずる、思わずゲーム画面を体で隠す。

智子「おばあちゃんね、何かすっかり張り切

っちゃってるよ。ゲームが面白かったらニ

ンテンドーに持ち込みにいこうかって」

ゆずる「いや、まだちょっとわかんないよ」

智子、出ていく。

ゆずる「(ぼそり)何で俺が慌てなきゃいけない

いんだよ…」

ゆずる、ゲームを続ける。

○ゲーム画面

アングル設定画面を開く。

「真上から」をクリックする。

画面が対局面面に戻る。

将棋盤が真上からのアングルとなり、や

っと見やすい形で表示される。

将棋盤の中央に駒の山。

一見将棋倒しだが、本将棋のようにい九

に王将、 \square に玉将がそれぞれ配置されている。

王将は後手が動かした飛車や銀に囲まれた状態になっている。

ゆずるの声「：どんなルールなんだよ」

マウスカーソル、今度はうまく駒を掴む。掴んだ飛車を右端のマスに置いて王手をかける。

vo「先手1ー飛」

CPU、玉将で1ーにいる飛車を取る。

vo「後手同じく玉」

ゆずるの声「え。その駒動かせるのかよ」

試しにマウスカーソルで王を掴んでみる。左半分全体のマスが移動範囲として赤くなる。

ゆずるの声「うわ。すごい動ける。すごい動けるのに左にしか進めない」

掴んだ王を左隅のマスに移動させる。

vo「先手6九王」

○誠の部屋

パソコン画面から以下のボイス。

vo「後手」五角」

ゆずる、無表情のまま画面を見つめ、

ゆずる「(ため息)」

ゆずる、立ち上がる。

○廊下

ゆずる、そっと階下をうかがう。

智子と幸子の笑い声が響く。

○居間

智子と幸子、テーブルで茶を飲んでいる。

幸子「ニンテンドーよりプレイステーションに持ち込みしようかしら」

智子「やだお母さん。プレイステーションは会社の名前じゃないよ(と笑う)」

○廊下

ゆずる「∴」

○誠の部屋

ゆずる、戻ってくる。

ゆずる、マウスを操作して左端のマスに
いる王将を掴む。

以下のダイアログ画面が出る。

「その駒は動かさせませんが、動かしたいです
か？ はい いいえ」

ゆずる、「はい」を選択する。

王将の移動範囲が全マスになる。

ゆずる、冷めた目で、

ゆずる「叔父さん：だか叔母さんだか知らな
いけど、今日、あなたの一生は本当の意味
で詰んだ」

ゆずる、王将を玉将のいるマスの上に移
動させる。

ゆずる「さよなら」

ゆずる、指をマウスボタンから離す。

○ゲーム画面

突然、画面が必殺技演出画面に切り替わる。

3D ポリゴンで作られたずんぐりむっくりな男が出てくる。

男の「△」(舌足らず)くらえっ！」

男、どこか懐かしい赤い「▽」シャツを着ている。

どこか見覚えのある丸い顔。

どこか聞き覚えのある舌足らずな声ー

○誠の部屋

ゆずる「(脳裏に稲妻が走る)」

○フラッシュバック

ゆずる(5)、赤い「□」シャツを着た誠(29)と将棋盤に向き合っている。

誠、桂馬を動かしている。

誠「これが桂馬の動かし方。覚えられる？」

ゆずる、熱心に聞いている。

×

×

×

ゆずる、将棋盤とにらめっこしている。
誠、ファンタオレンジを持ってやってくる。

ゆずる「(見て) あ！」

誠「ジュースタイムにしよう」

ゆずる、受け取り、ごくごく飲む。

誠「ゆずるはファンタオレンジ派だもんな」

ゆずる「うん！」

×

×

×

誠、うまい棒をどっさり抱えてゆずるのもとにやってくる。

誠「ゆずる。うまい棒全種類かけて一勝負すっか」

ゆずるの顔がぱっと輝く。

×

×

×

駒の散らばった将棋盤。

ゆずる、うまい棒を頬張っている。

誠、にこにこ眺めている。

○（戻って）誠の部屋

ゆずる、パソコン画面に映し出された3D
ポリゴンの男を見て、

ゆずる「（叫ぶ）叔父さんだア！！」

○ゲーム画面

ゲーム内の誠、指に挟んだ玉将を相手の
玉将へ目がけて力強く打ち込む。

と、画面が対戦相手の必殺技演出画面に
切り替わる。

相手キャラは緑の「シャツを着た誠だ。

誠△〇「させるかっ！（舌足らず）」

緑「の誠、玉将に念力を送り始める。

ゆずるの声「（絶叫する）色違いの「シャツ
を着た叔父さんだア！！」

○フラッシュバック

緑のHシャツを着た誠、縁側でゆずると将棋を指している。

ゆずる、王手をかける。

誠「ほう。そうきたか」

× × ×

ゆずる、将棋盤に並んだ駒を食い入るように見ている。

誠、そんなゆずるを横で見ている。

誠「(にこにこ)俺の作った詰め将棋、解けたらうまい棒30本食べられるぞ」

ゆずる、ますます前のめりになる。

× × ×

誠の部屋の前。

ゆずる、泣きながら、

ゆずる「叔父さん？　どうしたの？　将棋し
ようよ。叔父さん！」

ゆずるの肩に優しく手がおかれる。

幸子、立っている。

幸子「（寂しげに）誠はね、色々あって少し疲
れちゃったみたいなの」

ゆずる「…」

○（戻って）誠の部屋

ゆずる「思い出した…叔父さんのこと…」

パソコンのゲーム画面に宙に浮かんだ玉
将が映し出されている。

緑□の誠の念力で浮いた玉将が、赤□が
打ち込んだ玉将の上にぽとりと落ちる。

玉将、取られる。

△「あなたの負けです」

ゆずる、放心状態。

ゆずる、やがて立ち上がって、

ゆずる「（声を震わせ）叔父さん…こんな冗
談だろ」

ゆずる、パソコンの前に立つ。

ゆずる「叔父さんがこんなクソゲー作るはず
ないよ：冗談だろ。冗談だっていつてくれ
よ、叔父さん！」

ゆずる、両手でパソコンを乱暴に揺さぶ
り、

ゆずる「(絶叫) 答えろよ！」

○居間

幸子と智子、テーブルで茶を飲んでいる。

幸子「ニンテンドーがダメならセガサターン
って手もあるわね」

智子「だからお母さんそれ：」

二階からゆずるの絶叫が響く。

智子、天井を見上げ、

智子「：？」

○誠の部屋

ゆずる、血眼になってマウスを操作して
いる。

パソコン画面には将棋盤が真下からのアングルで映し出されている。

ゆずる、将棋盤の木目を手当たり次第クリックしまくる。

ゆずる「あるんだろ！ どっかをクリックすると！ 隠しゲームが！ 桃鉄みたいに！」

が、いくらクリックしても何も起きない。

ゆずる「俺、やだよ！ 叔父さんがこんなものしか残せなかったなんて！ 俺、そんなのやだよ！」

ゆずる、アングルを真横からに変更し、割り箸のような将棋盤をクリックしまくる。

ゆずる「叔父さんの力はこんなもんじゃないはずだ！ 詰め将棋だって簡単に作ってたじゃないか！ こんなゲームのために叔父さんは俺を突き放して部屋にこもったのか！ 見せてくれよ！ おじさんの生きた証を俺に見せてくれよ！」

が、やはり何も起きない。

ゆずる、疲れてどかっと床に倒れ込む。

ゆずる、じっと天を仰ぐ。

○ゆずるの家・ゆずるの部屋（回想・二ヶ月
前）

ゆずる、switchで麻雀ゲームをしている。

ドアがノックされる。

智子、入ってくる。

智子、寂しげにゆずるを見て、

智子「ゆず、誠、死んじゃった」

ゆずる「…」

智子「おばあちゃんと相談して、お葬式は家族だけですることになったから」

ゆずる「ふーん」

智子「ふーんって。誠のこと覚えてるでしょ？

昔よく遊んでもらってたじゃん」

ゆずる「覚えてないし。リーチ！」

智子、呆れて出ていく。

ゆず、一発でツモる。

ゆずる「ツモい！」

○（戻って）誠の部屋

ゆずる、起き上がる。

ゆずる、ふとパソコンに目をやる。

いつの間にかゲーム画面に新しいメッセ

ージが表示されている。

ゆずる「：？」

○ゲーム画面

ゲーム画面に以下のダイアログ。

「おまけモードが追加されました」

ダイアログを閉じるとトップメニューに

以下の選択画面が表示される。

「○対局モード

○おまけモード」

○誠の部屋

ゆずる、息をのみ、恐る恐る「おまけモ

ード」をクリックする。

ゆずる「(ハッとする)」

○居間

ゆずる、階段を下りてやってくる。

テーブルで茶を飲む幸子と智子、ゆずるを見る。

智子「どしたの？ 騒がしかったけど…」

ゆずる「…ゲーム、プレイしてきた」

智子「どうだった？」

ゆずる「(困ったように笑う)」

幸子「そう…」

智子「そりゃそうだよ。お母さん」

幸子、台所へと立つ。

ゆずる、何か言いたげに突っ立っている。

智子「ゆずる？」

ゆずる「…でも、叔父さんのこと思い出した。

あと、叔父さんから将棋教わったことも」

ゆず、照れ臭そうに智子に背を向ける。

智子、ゆずを見て、

智子「(微笑む)」

○ゲーム画面（おまけモード）

一枚の写真が表示されている。

それは在りし日の縁側での風景。

幸子と智子が見守る中、楽しそうに将棋を指す誠とゆずるの姿。

（おわり）